

## 比喩と無助詞：関連性と意味の変化

西 裕一郎

本論では、無助詞は「書きことば」にも現れるという視点から、〈比喩と無助詞の関連性〉を検討する。はじめに、「比喩」と「無助詞」に関する基本事項を確認する。次に、〈無助詞または助詞の選択〉という視点で、〈無助詞の機能〉を分類し、意味の変化を考察した。そして、本論の中心となる〈比喩と無助詞を含む文〉の構造と意味を検討した。また、無助詞が現れないときと比較し、〈比喩と無助詞の関連性〉を考察した。

キーワード：比喩，隠喩，換喩，提喩，カテゴリー，無助詞，話しことば，書きことば

### 1. はじめに

私たちは、情報を伝えるときに、比喩を用いることがある。たとえば食事の会話では「目玉焼き作れる?」「みんなで鍋をつつこう」「お好み焼き食べる?」のように比喩を日常的に使って、伝えたい情報を示唆的に提示している。とりわけ、日本語においては、伝えたい情報を遠回しに（婉曲的に）伝えようとすることが多い。話し手は、比喩や助詞を、表現する際の道具として使って、間接的に表現しているのである。他方で、聞き手は、話し手によって〈意図された意味〉（intended meaning）を解釈・判断して情報を受け取っている。

助詞（particle）には、内容語と機能語を結びつける役割がある。聞き手にとっても、助詞は1文字程度で効率よく、〈意図された意味〉を明確に把握することを可能にしている。実際に、「ご飯食べたい」と「ご飯が食べたい」のように、私たちは、助詞を使い分けて情報を伝えている。日本語を母語とする人々は、こうした表現を無意識に使っているから、日本語初学者（子ども、外国人学習者）が比喩や助詞を誤用すると、その表現が適切でないことを直感する。同じことは、無助詞（zero particle）にも言える。

無助詞は「話しことば」や「書きことば」に登場している。そのため、無助詞を〈助詞の省略〉と捉える従来の理論では、不十分であることを指摘し、〈無助詞または助詞の選択〉という視点で〈無助詞の機能〉を分類した。たとえば、「ご飯食べたい」と「ご飯が食べたい」のように〈無助詞と助詞の使い分け〉をする際に、「ご飯」という比喩の意味の変化を考察した。

### 2. 比喩の種類

一般に、比喩は、直喩／明喩（simile）、隠喩／暗喩（メタファー：metaphor）、換喩（メトニミー：metonymy）、提喩（シネクドキ：synecdoche）がある<sup>1</sup>。本論では、表現形式がそろっている「～焼き」という食べ物を例に、一般的な比喩の分類<sup>2</sup>に従って、比喩が日常生活になじみのある表現であることを確認する。

(1a) たい焼き

(1a)を〈文字通りの意味〉に解釈するならば、「鯛を焼き魚にした料理」を意味することになる。しかし、(1a)は一般的に「つぶあんやクリーム入りの焼菓子」を意味する比喩である<sup>3</sup>。とりわけ、「焼菓子〈たとえるもの〉」と「鯛〈たと

<sup>1</sup> これらをまとめてメタファーと呼ぶことも多い。辻（2002：25）では、「メタファー」が「比喩」の意味で使われるのは提喩であると説明している。

<sup>2</sup> 比喩の分類については諸説ある。たとえば、Lakoff and Johnson（1980）では、提喩を換喩の特殊なケースに含めている。

<sup>3</sup> たい焼きは、「鯛の姿をした鉄製の型に水に溶いた小麦粉を入れ、餡（あん）を挟んで焼いた菓子」（広辞苑第5版参照。以下、辞書と記す）と説明されている。

えられるもの」が似ている関係にあることから「たい焼き」は、類似関係に基づく転義が生じているので、隠喩（メタファー）である。ところが、次の(1b)と(1c)は、一見すると比喩表現（figure of speech）ではないように思える。

- (1b) たこ焼き           cf. 焼きだこ  
(1c) 卵焼き

たしかに(1b)「たこ焼き」は文字通り「タコを焼いたもの」を意味するように思えるが、「タコだけを焼いたもの」には「焼きだこ」という表現があるため、指示対象が異なっている。そこで、辞書で「たこ焼き」を引いてみると、「溶いた小麦粉に卵を混ぜ、刻んだ蛸・天かす・ねぎなどを加え、鉄製の型に流しこんで、球形に焼き上げた食品」とある。すなわち、タコと隣接する食材を含めて「たこ焼き」を意味するのである。

このように、「タコ」と「タコの周りにある食材」が空間的に隣接する関係にあるため、(1b)は、換喩（メトニミー）である。「たこ焼き」と「タコ」は、一般的に視覚上の類似性がないので、隠喩とは言えない。

(1c)「卵焼き」は、「鶏卵をとり、調味料を加えて焼いた料理」のことを指す。よって、他の動物の卵を意味するものではない。したがって、(1c)は上位概念「卵」で下位概念「鶏卵」を指す。すなわち、〈総称とその代表〉の関係にあることから、提喩（シネクドキ）となる。

このように、換喩や提喩には、隣接関係、部分と全体関係、類と種関係がある<sup>4</sup>。そして比喩は、私たちの概念体系や認知過程（cognitive process）の基盤となっている。(1b)が示す意味を経験的に記憶しており、比喩が意味内容とつながっているとされる。実際に、気がつかないほど、慣用的に使われている比喩が多いが、「～のような」「～風」という指標のある（indexical）表現が付加されると、たとえていることが判りやすい。

- (2a) どら焼き  
(2b) どら焼き風アイス  
(2c) どら焼きアイス

(2a)「どら焼き」は、通説によれば、金属製打楽器の銅鑼（どら）に似ていることから名づけられた。「どら焼き〈たとえるもの〉」と「銅鑼〈たとえられるもの〉」が類似関係にあるため、隠喩（メタファー）に分類される。(2b)は(2a)が比喩的転用を起こしたものである。「どら焼き」に、つぶあんではなくアイスを挟んだデザートを指示対象とすることばとして登場したようである。本来の比喩的意味が拡張して明示的に「～風アイス」と表現されるため、「～のような」「～風」という指標で表現する直喩表現になっている<sup>5</sup>。

### 3 - 1 . 無助詞が現れるとき（総論）

「無助詞」とは、内容語と機能語の関係を示す助詞が明示的に現れない形式をいう<sup>6</sup>。たとえば(3)のような無助詞文がある。（以下では必要に応じて無助詞を○で示す）

<sup>4</sup> 換喩と提喩の関係については、論者によって分類の仕方が異なる。

<sup>5</sup> 指標表現のない(2c)は隠喩に分類される。しかし実際は、どら焼きを冷凍させないレシピも存在するため、「アイスどら焼き」との区別が困難となっていて、ことばの揺れがある。アイスの商品でありながら、アイスとの指標がないものもある。たとえば、「雪見だいふく」は窓から眺める雪景色とアイスクリームの白色が似ている関係にあることから隠喩と言ってよさそうである。

<sup>6</sup> 文中に「は」や「が」が現れない文を「無助詞文」と定義すると、2010年の流行語となった「(それ(は)) いい質問ですね」も該当することになる。この場合、主語の省略で意味が異なるほか、質問の内容が「いい=良い、優れている」ことを意味することや、回答者にとって「いい=難しい、鋭い」質問であることを含意する。話し手の意図には、i)「いい質問ですね」は談話標識で「そうですね」のように大した意味を持たず、回答内容を考えるためのことば、ii) その後の展開のために準備して「よくぞ質問してくれた」という意味の応答、iii) 回答を準備しておらず、窮している状況で用いられるアイロニー的応答、などが考えられる。談話標識と考えると、i) の用法はスポーツ選手に、ii) は解説者に、iii) は政治家に使われているようである。「いい質問」は場面によって異なる意味になる。

(3) お腹すいたね。

(3)を「お腹がすいた」と言われる完全な文から、助詞「が」が省略された文と位置づけるのが従来の説明であった。もともと「お腹すいた」の表現は、子どもの発話を中心に顕著にみられるため、無助詞文を不適格文と捉えるべきではない。また、(a) 助詞を付加すると、助詞「が」が持つ機能により、「強調」、「限定」のような意味が、明確になる、(b) 無助詞文は、省略 (ellipsis) では説明できない特有の意味を持つという視点で論じる必要がある<sup>7</sup>。

したがって、本論は「広く普及している〈無助詞＝助詞の省略〉という単純な説明に疑問を投げかける」小屋・辻(2008)の見解をとる。小屋・辻(2008)によれば

「ある文法要素が『省略される』とか『欠落している』という見方は、形式的にも意味的にも完全な文を想定する文法観に立脚してはじめて成り立つものである。しかし現実の言語現象を観察すれば明白だが、文の生成は必ずしも完全な文や形式を最初から想定してなされるのではなく、必要とされる要素がオンラインで徐々に組み合わされ作り上げられていく。このため、『省略』という視点とは逆に、構成要素の文法的・意味的關係を明瞭にして精緻さを与える場合の助詞の『付加』という視点も必要になるだろう」(ibid: 299)

としている。

### 3 - 2 . 無助詞の機能

本節では、〈無助詞または助詞の選択〉という視点で、〈無助詞の機能〉を分類する(下記一覧表参照)。無助詞文が常にここに挙げた諸類型のいずれかにあてはまると考えるのではなく、ここに挙げた類型は、あくまでも〈無助詞の機能〉を分析する際の「ひな型」と考えたい。

#### ：無助詞の選択（無助詞が現れるとき）

- ・ 助詞を使うと不自然になるもの（→「『は』も『が』も使えない文」）
- ・ 無助詞を使う方が自然な表現であるもの  
（助詞を使うと助詞特有の効果がでて他の意味になるために助詞を回避している）
- ・ 無助詞特有の臨場感・親近感を表現するもの  
→「今売れてます」「Suica 使つてね」

#### ：助詞の省略

- ・ 助詞の有無で、意味がほとんど変化しないもの
- ・ 情報伝達の効率性を重視し、省略されるもの  
→「空きあります」「両替できます」「速度落とせ」

#### ：助詞の付加

- ・ 無助詞も使えるが、あえて助詞特有の効果を利用し、他の意味を引き出すもの  
→「PASMO が使えます」

#### ：助詞必須（無助詞が現れないとき）

- ・ 無助詞では不自然になるもの
- ・ 助詞を使う方が自然な表現であるもの  
→「京都は清水寺に行ってきました」

<sup>7</sup> 助詞を付加するかどうかによって、形容詞の程度を変えて表現できる効果もある。

(例)「おもしろくゆない」(≡つまらない)、「おもしろく は ない」(≡普通だ) (例文は加賀野井(1999: 116)を改変)

有助詞文から助詞を省略したものがII、無助詞文に助詞を付加したものがIIIとなる。よって、無助詞文の存在し得る範囲はI~III、有助詞文の存在し得る範囲はII~IVとなる。したがって、〈無助詞または助詞の選択〉はI~IVの中で行われ、どちらの表現も適切であるときは〈無助詞と助詞の使い分け〉によって意味を変化させているといえる。この点において、小屋・辻（2008）は

「無助詞の使用というのは、話し手と聞き手の間に存在する発話の理解に最適かつ合理的な文の使用法と密接に結びついている。文法の発達に伴い、助詞使用による意味と形式の精緻化が成立した大人であっても、なお無助詞文を多用するのはこのためである。無助詞と有助詞の併存は、限られた系列的な統語形式の中に、いかに複雑なものごとの捉え方と意味表象を埋め込むかという要請に応える工夫の表れである。」(ibid: 307)[下線は筆者による]

と結論付けており、本論との理解において共通する点がある。

#### 4 - 1 . 無助詞が現れるとき (各論)

本論では、「話しことば」(主に会話)に限らず、「書きことば」(主に宣伝広告、ウェブサイト)においても無助詞はみられる、との見解<sup>8</sup>で論じていく。したがって、無助詞は話しことばに特有の文とする見解<sup>9</sup>とは異なるものである。つまり、無助詞文は、現在のように慣用表現として広く定着 (entrenchment) するまでに、様々な過程がある、と筆者は考えている。

(a) 発話・会話等の「話しことば」(音声言語)<sup>10</sup>

(b) 宣伝広告・ウェブサイト(ブログ・Twitterを含む)等の「書きことば」(文字言語)

(a)の中でも、次のような質問文に無助詞が現れる。

(4) お好み焼きを食べる？

(4)には「作ろうか？；好き？；味見する？」などの意味が込められている。ことばの意味が場面状況に依存している場面では、無助詞が現れることが多い。ここで助詞「を」を付加して「お好み焼きを食べる？」と発言すれば、「お好み焼き」が「主題」ではなく「指示対象」となる。また、「たこ焼きではなくお好み焼きを食べる？」のように、対比の意味になる。無助詞が選択されるのは、情報伝達の効率性を高めるほか、誤解を避けるためにも使い分けされている。「話しことば」に現れる無助詞文は、存在「～ある？」や可能「～できる？」の質問文が多い<sup>11</sup>。「お好み焼きを食べる。」のような平叙文は、行為の確認になって不自然なものが多い。

「お好み焼き」を辞書で引いてみると、「水で溶いた小麦粉に魚介類・肉・野菜など好みの材料を混ぜて、熱した鉄板の上で思いのままに焼きながら食べる料理」とある。ここでは、好みの食材が「成員間に共通する属性のないカテゴリー<sup>12</sup>」を形成しており、換喩(メトニミー)に該当する。

次に(b)の例を挙げる。夏になると飲食店を中心に(5)のような宣伝表示を見かけることが多くなった。どの店が始めた表示であるのかはわからないが、「書きことば」(宣伝広告、ウェブサイト)として定着しているのは事実である。

<sup>8</sup> 小屋(2008)も、本論でいう「書きことば」の例(冷やし中華始めました)を挙げている。

<sup>9</sup> たとえば、長谷川(1993)、山田・中川(1995)など

<sup>10</sup> 小説・書きおこしのインタビュー・対談等「話しことば」を「書きことば」に編集したものを含める。

<sup>11</sup> 尾上(1987)参照。「ナイフある？」「ロシア語読める？」など。

<sup>12</sup> Barsalouが提唱したアドホックカテゴリー(ad hoc category)のこと。楠見(1995:9)では、〈どろどろしたもの：心と沼〉、辻編(2002:31)では、〈火事の時に持って逃げるもの〉が例として挙げられている。

## (5) 冷やし中華はじめました

「冷やし中華」「はじめました」という表現が、助詞を使わずに文として構造を持っているため、無助詞文である。それに対して、李（2010：22）では、「冷やし中華をはじめました」という例文が挙げられており、「もの＋を＋はじめました」の構造として説明されている。たしかに、店長が「うちの店は冷やし中華をはじめました」と言って宣伝している場面状況であれば、助詞を使用した文構造の「話しことば」として説明し得るだろう。しかしながら、実際に使われている宣伝表示は、「書きことば」であり、無助詞の形式をとる(5)が定着している事実を考えると、現実の言語現象は、より多様性を含んでいるのかもしれない。実際に「冷やし中華をはじめました」という表示を出している飲食店は、筆者がインターネットで検索した限りでは、見当たらなかった。したがって、無助詞を議論する際には、「話しことば」と「書きことば」の相違を考慮しながら、それぞれにおける無助詞特有の臨場感や親近感を表現する機能を検討する必要がある<sup>13</sup>。

## 4 - 2 . 「書きことば」における無助詞の機能

先行研究では、無助詞文を「は」と「が」の文と比較して説明する流れがあった。他方で、『は』も『を』も使えない文の研究は少ない。そこで、本節では、無助詞と助詞「は」、「が」、「を」の文例を参照し、「書きことば」における無助詞の機能を検討した。下記の議論は、3 - 2で挙げた一覧に沿ったものである。

以下、(a)の例文は実際に宣伝広告として使われているものである。

- (6a) 今売れてます
- (6b) 今（\*は / \*が）売れてます
- (7a) Suica 使ってね
- (7b) Suica（\*は / \*を）使ってね

(6a)と(7a)は、はじめから無助詞として登場した例と考えられる。助詞を使うと不自然になるため、省略という説明は成り立たない。省略されたと言えるのは、適切な助詞を本来の場所に復元すると、自然な表現になる場合のみである。実際の売上はわからないが、売れてほしい商品に(6b)を表示すると、他の意味を示唆する可能性があり、〈無助詞の選択〉によって助詞を回避している。

(6a)と(7a)は「書きことば」の例として挙げているが、「話しことば」としても十分に使われる点を考慮すると、無助詞には会話調で表現できる機能がある。つまり、3 - 2で示したように〈無助詞の選択〉によって無助詞特有の臨場感<sup>14</sup>・親近感を表現することができる。(6a)は、店員の代わりに「今売れてます」と言っていて、無助詞が会話調の機能を担っているとも考えられる。(7a)は、Suica<sup>15</sup>が私たちの生活に身近なものとなっていることを、Suica ペンギンが看板を持って話しかけて親近感を表現しているようである。

このように〈無助詞 = 助詞の省略〉という説明ができない無助詞があるのに対し、次に挙げる看板は、助詞の有無によって意味がほとんど変化しない、と思われる。

- (8a) 空きあります
- (8b) 空き（\*は / が）あります
- (9a) 速度落とせ
- (9b) 速度（\*は / を）落とせ

(8a)は、駐車場や不動産物件の空きを示す看板、(9a)は、高速道路の電光掲示板や工事現場の立て看板に書かれている

<sup>13</sup> 山田・中川（1995）では、「話しことば」と「書きことば」で、無助詞が現れる特徴が異なるという趣旨の見解を示している。

<sup>14</sup> 小屋（2008）では、現場指示的、ライブ的、臨場感、などと表現している。

<sup>15</sup> 東日本旅客鉄道株式会社の登録商標。

ものであるが、ここにも無助詞が現れる。(8b)の「空기가あります」と(9b)の「速度を落とせ」は実際に使われることがある。それぞれ「が」と「を」の助詞を復元するならば、自然な表現になることから、〈助詞の省略〉と分類できる。また、(9a)は高速道路や事故の多い場所に設置されることが多く、運転手の目につくように、〈助詞の省略〉が起きている、と考えられる。このように、〈助詞の省略〉による無助詞には、情報伝達の効率性を重視するものが多い。

(10a) PASMO ( Φ / が ) 使えます

(10b) PASMO ( \*は / \*を ) 使えます

(10c) このお店で Suica 使えます PASMO も使えます

PASMO は首都圏の鉄道やバスで利用できる IC カードとして知られている<sup>16</sup>。飲食店での支払いにも利用できるほど普及しており、(10a)「PASMO が使えます」と強調する広告も普及している。したがって、(10a)は〈無助詞の選択〉もできるが、あえて助詞特有の効果を利用し、意味を引き出すこともあり、場面によって〈無助詞と助詞の使い分け〉が行われる。(10c)は、無助詞が会話調の機能を担っていると考えられる。少なくとも(7a)同様の「Suica を使ってほしい」という趣旨であろう。しかし、「このお店で Suica・PASMO 使えます」とは表示していないため、むしろ「Suica の方を使ってほしい」という印象を受ける。宣伝広告は、限られた範囲に必要な情報を効率よくわかりやすく伝えることが要請されるものであるため、〈無助詞の選択〉が顕著にみられる。また、列挙するものの順序も情報であるため、「Suica を使ってほしい」場所に、「PASMO・Suica 使えます」などと表示することはないのである。

### 5 - 1 . 比喩と無助詞の関連性 ( 構造編 )

これまでの文例からも、無助詞文には比喩が含まれている場合が多いことが事実としてある。では、それは偶然隣接したものであろうか。本節では、比喩と無助詞の前後関係によって次に挙げる2つの類型を設けて、比喩と無助詞が意味的に関連していることを論じていく。

(i) 「名詞句 ( 比喩 ) + 無助詞Φ + 動詞」の順序 : 「前置比喩」とする

(ii) 「名詞句 + 無助詞Φ + 動詞 ( 比喩 )」の順序 : 「後置比喩」とする

(i) 前置比喩について

「名詞句 ( 比喩 ) + Φ + はじめました」構文となる場合がある。

(11a) 炭酸泉はじめました

(11b) 冷シャンプーはじめました

(11c) おでんはじめました

(11a)は、長期間にわたって「はじめました」と表示している美容室の宣伝である。美容室に温泉があるわけではないため、本来、炭酸成分を含む温泉や鉱泉として用いられる「炭酸泉 ( たんさんせん )」の意味が転用されていると考えられる。(11a)の宣伝に〈意図された意味〉は、髪と頭皮の汚れをきれいに洗い流すコースを、炭酸泉の「噴き出す勢い」にたとえているのではなかろうか。そうであれば、類似関係があるため、隠喩 ( メタファー ) となる。

(11b)をみると、「シャンプー」は「石鹸の泡」のことを指している。「石鹸の泡で洗髪すること」を「シャンプー」と表現しているため、換喩 ( メトニミー ) となる。「冷蔵庫などで冷やしたシャンプー」を使うことから「冷 ( れい ) シャンプー」と表現される。

冬になると、コンビニでは(11c)の表示が目立つようになる。そもそも、「おでん」は煮込み田楽の略であり、豆腐を串に刺した形が、田楽 ( でんがく ) 芸能の踊る芸人の姿に似ていた ( メタファー ) ことから、田楽豆腐と呼ばれ、串刺しのこんにゃくや大根、厚揚げなどを煮込んだものになったとされる。したがって、「おでんという煮込み料理」と「豆腐」

<sup>16</sup> 株式会社パスモの登録商標。

は〈総称とその代表〉の関係にあり、提喩(シネクドキ)であったと推測されるが、もしそうであれば死喩( dead metaphor )である。最近の「おでん」の代表例は豆腐というよりはむしろ、大根・こんにゃく・巾着・厚揚げ等であるため、意味の変化がみられる。

このように、(11a)~(11c)の「はじめました」構文は〈比喩と無助詞を含む文〉になる。こうした宣伝広告を見ていくと、(5)も〈比喩と無助詞を含む文〉とわかる。

#### (5) 冷やし中華はじめました

「冷やし中華」は、「中華風の麺の上に錦糸卵、キュウリ、ハム等を織切りしてのせて、味付けをした料理」のことを指しており、他の具体的な中華料理を指さない。また、「冷やし中華そば」や「冷やし中華麺」の上位概念として「冷やし中華」という表現が定着している<sup>17</sup>。したがって、上位概念で下位概念を指すことから、提喩(シネクドキ)に分類される比喩である。

たしかに、(5)の表示が普及している理由には、①始めていない料理がほかにある印象を与えて不自然(対比)、②「冷やし中華」は、夏の限定メニューであるが、当店も注文を受けていて遅れていないという意味、③他動詞「~を始める」の助詞「を」の省略<sup>18</sup>、④文字数が増えて広告費用がかさむ、など様々な理由が考えられる。しかし、それは内容の異なる無助詞文にはあてはまらない。他方で、〈比喩と無助詞を含む文〉としての説明は一貫して可能である。

#### (ii) 後置比喩について

##### (12a) お前(Φ/ガ)片付けてこい。

学校や会社で、「片付ける」対象として思い浮かぶのは「机」や「仕事」であろう。「片付ける」対象となるのは「場所をふさぐもの=邪魔物」であるから、状況によっては「片付ける」という動詞の意味が「人を殺す」ことに変化することもある。これは、本来の意味が比喩的に転用された用法にあたる。つまり、対象が「邪魔者」であれば「片付ける=殺す」を意味するし、「仕事」であれば「片付ける=やり終える」を意味するのである<sup>19</sup>。したがって、このような〈比喩と無助詞を含む文〉の意味を考えると、場面状況が大きく関係する。このことから、(12a)の文に助詞を付加すると、話し手の意図が微妙に変化してしまうため、〈無助詞=助詞の省略〉という説明はなじまない。本論3-2のような〈無助詞または助詞の選択〉という広い視点で考える必要がある。

##### (12b) お前(Φ/ガ)消してこい。

(12b)も、消すものが「照明」なのか「邪魔者」なのかが明確でない性質が無助詞に現れている。これらは、「後置比喩」の例である。無助詞文には、ものごとを曖昧にする機能(婉曲表現)に加え、逆に「戦略的に」意味を強調するものもある。

### 5-2. 比喩と無助詞の関連性(意味編)

「話しことば」における無助詞文は、文字通りの意味とは異なる意図で発話されるものが多い。

#### (13a) 今日は天気ですね。

#### (13b) 今日Φ天気ですね。

<sup>17</sup> 辞書では「冷し中華」と表記されているが、ウェブサイトを検索・参照したところでは「冷やし中華」と表記する宣伝広告が多い。

<sup>18</sup> 自動詞「始まる」を使うと「冷やし中華はじまりました」となって不自然である。メニューに「冷やし中華」を加えたのは店長であるにもかかわらず、客観的な表現で他人事のような印象を与えてしまい宣伝として不自然である。

<sup>19</sup> 國廣編(1982: 45-52)参照。

私たちは、(13a)と(13b)を、一般的に「天気=晴天」の意味で使っている。すなわち、上位概念「天気」で下位概念「晴天」を表現している。他方で、「天気」は、晴天だけでなく、くもり、雨、雷雨、雪など天候状態の悪いものを含めた総称として用いられる。このように「天気」は、晴天を意味する無標の提喩<sup>20</sup>としての用法も慣用化しているのである。「天気が悪いですね」とは「天気」の示す意味が異なっていることがわかる。したがって、「天気」が比喩であるため、(13b)は、本論で述べた〈比喩と無助詞を含む文〉の「後置比喩」に該当する。

(13a)は、主題 (topic) の「は」、対比 (contrast) の「は」の意味で用いられる<sup>21</sup>。それに対して(13b)は、〈無助詞の選択〉により、助詞「は」にある特有の効果を回避することで、「天気」の意味を強めることができる。「天気」が強調されるため、「快晴」「暖かくて過ごしやすい」の意味で「天気」が使われるようである<sup>22</sup>。

次に、無助詞と「を/に」の例文を参照する。〈比喩と無助詞を含む文〉の「前置比喩」に該当する。

(14a) お茶にする？

(14b) お茶中する？

(14a)は、「そろそろ、休憩する？」という示唆的な意味、「飲み物はお茶にする？紅茶にする？」という確認の意味、などが考えられ、表現は同じでも、状況によって意味が異なってくる。(14a)からは、「喫茶店に入ってお茶を注文する」というスクリプト<sup>23</sup>が後に続くとは考え難い。

それに対して、(14b)のように、無助詞を選択する会話では、「喫茶店でちょっとおしゃべりする？」という意味になる。この場合、お茶を飲みながら会話することや、近くにお茶があることから、場所的・時間的に隣接関係にある、換喩 (メトニミー) として「お茶」の意味を捉えることができる。

他方で、(14b)では、お茶が飲み物のカテゴリーにおける代表例 (プロトタイプ: prototype) となっている。紅茶でもコーヒーでもよいので飲み物の意味で「お茶」と表現する場合は、下位概念「お茶」で、上位概念「飲み物」をさすことから、〈総称とその代表〉の関係にある。すなわち、「お茶」が提喩 (シネクドキ) になる。さらに、「お茶」が「軽めの食事」の意味で使われることがある。また、「お茶」は文字通りの「お茶をたてる」という「お茶=抹茶」の意味もあるため、場面状況によって使い分けられる多義的概念である。

このように、「お茶」が比喩的拡張 (metaphorical extension) を起こすとともに、助詞の有無で意味が変化することがわかる。つまり、「お茶」は、文字通りの意味と比喩的な意味を有しているとともに、助詞の有無によって、意味が連動する関係になっていると考えられる。

本論に対しては、(14b)は「お茶する」全体が動詞である、という反論があろう。たしかに「食事をする」とは言わず「食事する」、「ご飯をする」ではなく「ご飯する」、「勉強をする」は「勉強する」と言っている。しかし、疑問文では「食事する？」「勉強する？」とは言えるが、「ご飯する？」は不自然な表現である。

助詞の省略として考えるならば、助詞「を」を復元すると自然な表現になるはずである。しかし、「お茶をする？」の疑問文は不自然であるし、「お茶をする」の平叙文では「お茶=抹茶」の意味になるなど、お茶の意味が変化する。

そこで、本論では(14b)を「比喩+Φ+動詞？」構文として考える。「比喩+を+動詞。」が行為の文として適切な表現となる場合、それを無助詞の疑問文にしたときも、「比喩+Φ+動詞？」という自然な無助詞文が成立する。「お茶をする」の意味は「お茶中する」とは異なるが自然な表現であり、「お茶」が比喩であることに変わりがないので、疑問文の(14b)が成り立つ。このほか、自動車・書物・家屋は、それぞれ比喩であるので、「車を買う」→「車買う？」(自動車)、「本を借りる」→「本借りる？」(書物)、「家を出る」→「家出る？」(家屋)などがある。「お茶」と同様の多義的概念である「ご飯」についてみると、

(15a) ご飯にする？

(15b) \*ご飯中する？

<sup>20</sup> 森 (2009) では「特定化タイプの提喩」と呼んでいる。

<sup>21</sup> 文全体が談話標識の役割を持ち、沈黙を回避したり、後に続く会話のリズムを整えたりする効果として用いられることもある。

<sup>22</sup> 日本語学によると、例文中にある終助詞「ね」も無助詞と関係が深い。

<sup>23</sup> “スクリプト”とは、レストランで食事をするときなどの「日常繰り返される事象に関する知識を指す」(楠見 2005: 12)

(15c) \*ご飯をする？

「ご飯する」全体を動詞と捉えると、「ご飯する？」が不自然な表現であることを説明できない。「ご飯」は比喻であるが「ご飯をする」という表現は不自然である。したがって、「比喻+ +動詞。」が行為の文として適切な表現とはならないため、「比喻+Φ+動詞？」構文、すなわち〈比喻と無助詞を含む文〉として考えるべきである。

(15a)の「ご飯」は、食卓に並ぶ「料理」を含めた意味を持っており、文字通りの「米粒」を指すとともに、「味噌汁、魚、肉」などの典型的な料理の総称として用いることもある。したがって、「ご飯」は提喻(シネクドキ)に分類される。(15b)の代わりには「食事する？」がある。「食事」も「お茶」と同様に「ご飯を食べながら休憩する」の意味や「デートのお誘い」の意味に使われるなど、〈無助詞の機能〉のほか、語の意味とカテゴリーの問題、そして比喻の問題が関係している。とりわけ次の例において顕著になる。

(16a) ご飯Φ食べたい。

(16b) ご飯が食べたい。

(16a)は、一般的に「ご飯=食事」の意味で使われ、「お腹がすいた」ことを遠回しに表現している。また、(16b)は「ご飯=お米」のことを意味しており、パンやパスタではなく「ご飯=白ご飯」という印象を受ける。ところが、場面によって両者はどちらの意味の「ご飯」にもなり得るのである。たとえば、(16a)は、「ご飯にする？パンにする？」と尋ねられた際の応答として〈無助詞の選択〉をすることがあり得る。(16b)は、デザートではなくて「ご飯=食事」を食べたい場面で言うことがあり得る。このように、〈比喻と無助詞を含む文〉は場面によって比喻の意味に趣深い変化をもたらすことがある。

次に、会話文における〈比喻と無助詞を含む文〉を参照する。

(17)

A: ちょっと行ってくるね<sup>24</sup>。荷物(Φ/?は/?を)よろしく。

B: じゃあ、荷物の中(Φ/も/\*は/\*を)みておくれ。

A: えっ!?<sup>25</sup>

Aは「荷物よろしく」と言っただけで荷物を監視することをBにお願いしている。通常であれば、「私の荷物は他人に引き寄せられないようBが見張っておく」ことが共有情報となる。したがって、動詞「みる」は、一般的には「見張る、見守る」の意味で「みておく=見張っておく」ことになるはずである。ところが、Bは「荷物の中」を指示対象としているため、Bがどのように解釈しているかは場面状況のほか、〈無助詞または助詞の選択〉によって解釈が異なり得る。

はじめに、「荷物よろしく」の発言に関しては、「荷物(/?は/?を)よろしく」と助詞を使うと意味が変わる。もちろん、その荷物は見張ってくれるだろうが、他の荷物(たとえば貴重品やカギ)などがあれば見張りの対象外になる可能性がある。すなわち、限定(exclusive)の助詞「は」や「を」を使うと、「この荷物については」や「他ではなく荷物を」の意味が生じるため、使わない方が適切である。したがって「荷物よろしく」は、助詞を使うと他の意味になることや不自然な表現となるため、無助詞が現れる。

第2に、「荷物」が比喻であることが言える。「荷物」のカテゴリーには、様々な名称の所持品が含まれる。他方で、「重い荷物」は類推によって精神的重荷に転用され「お荷物」という隠喩(メタファー)になる。さらに、「あいつは荷物だ」と、人間を荷物にたとえることがある。この場合は荷物が重く、それを背負わせる・重荷になる・苦痛になるという荷物そのものとの関わりに付随する過程から換喩(メトニミー)になる。したがって「荷物」という無助詞文は、〈比喻と無

<sup>24</sup> どこに行くのかを伝えていないため、示唆的な表現であるが、当事者が買い物やトイレに行く場面を理解しているので会話が展開している。聞き手が場面を理解していなければ、「どこ(Φ/)いくの〜?」と尋ねられるであろう。なお、「トイレ」は、「便所」を婉曲的に言い換えたものであったが、慣用化するにつれ、直接的な意味になってきている。「お手洗い」や「化粧室」も換喩(メトニミー)である。

<sup>25</sup> AがBに期待した内容(盗まれないように荷物を見張っておくこと)とズレがある。Bはこのズレを作り、冗談で相手を笑わせようとする意図している。

助詞を含む文）に該当する。

Aの依頼に対して、Bが「荷物の中のみておくね」と言った場合、Bは「みる＝中身を見る、調べる」の意味で受け取っている可能性があり、Aは「えっ！！」と驚くことだろう。無助詞の場合、臨場感があるため、本当に「荷物の中を調べる」意外な展開になりそうである。

他方で、Bが「荷物の中のみておくね」と言った場合も、動詞「みる」は荷物を「見張る」と「調べる」の意味を兼ねることになる。Aは、「Bが荷物の中をみること」を了解したわけではないので、慌てることになる。しかし、荷物の中を調べることは相手のプライベート領域を侵害するため自然な展開ではない。冗談と捉えるのが適切であろう。

このように、〈無助詞または助詞の選択〉により、指示対象を絞り込んだり、臨場感を表現させたりして、文の意味が変更され、比喻の意味も変化し得るのである。

### 5-3. 無助詞が現れないとき

本節では、比喻と助詞を含む文を参照し、どのような場合に、無助詞が選択されないのかを考える。

(18) メロンは別腹だ。

(18)は「満腹状態でも食べることができる」や「好きな食べ物である」の意味である。「別腹」と言っても、胃や腸などの臓器が別に用意されているというのは（文字通りの意味で解釈すると）変な話である。したがって、まだ食べ物が入るスペースがあることをたとえた表現であると考えるのが自然である<sup>26</sup>。ここで確認したいことは、「別腹」が〈対比の意味を含意している比喻〉であることである。比喻と助詞の両面から対比（メロンが他の果物より好きな食べ物であること）を強調しているため、無助詞が現れない。

(19a) あ、救急車（Φ / ガ）来た。（Masunaga 1988: 150 改変引用）

(19b) あ、白バイ（Φ / ガ）来た。

話し手が、日常性・必然性・共有情報があると判断している比喻が主語になっている場合には、無助詞が選択されるようである。他方で〈意外性・偶然性・非日常性のある比喻〉が主語となっている場合、助詞が使われることが多い。小屋・辻（2008）においても、

「行為に随伴する発話や、話し手・聞き手の間に共有情報が十分にある場合は、独立語（内容語）1語のみが使用され、複数の独立語が組み合わせられる場合においても助詞が付加されないことが多い」（ibid:304）

「情報が既知あるいは予測の範囲内である場合は助詞だけではなく独立語のない場合が可能である。たとえばバスを待つ場合、「あ、来た」、「あ、バス（ガ）来た！」は独立語のみ、無助詞文、有助詞文のいずれも使用可能である。しかし、「あ、救急車（ガ）来た！」を考えると、無助詞文は幼児の発話ではあり得るが、バスのように来ることが共有知識ないし予測の中にはないので、通常は、大人の発話では有助詞文のみが可能である。」（ibid: 309）

と指摘している。(19b)の「白バイ」には、白塗りのオートバイを意味するほか、警察官による取り締まりや、マラソンや駅伝の警備が行われているという意味もあり、換喩（メトニミー）となる。「白バイ」が来ることが既知となっているマラソンや駅伝では「白バイΦ来た」の無助詞文が可能で、先頭ランナーが近付いていることを意味するであろう。しかし、バス停でバスを待っていて、「白バイΦ来た」という無助詞文は不自然である。このように、場面状況によって比喻の意味が変化するだけでなく、〈無助詞または助詞の選択〉によって、文の意味が変わることもある。

<sup>26</sup> メロンではなくリンゴが目の前にある状態で「メロンは別腹だ」という発言をしたら話し手の意図はどうなるか。「メロンが食べたいのに」という心境を婉曲的に表現しているようにもとれる。

(20)

A: テレビをみた？

B: 通り魔がでたらしいね。

テレビ装置本体が指示対象となる場面では「テレビをみた？」と助詞「を」の含意する「対象性」を明示できる。しかし、「テレビ(を)みる」の「テレビ」は、映し出されている映像や放送しているニュースを指すのが一般的である。これは「テレビ映像」の省略との説明も成り立つが、「テレビ」と「映像」は隣接関係にあるため、換喩(メトニミー)と考えるべきである<sup>27</sup>。テレビが比喩であることから、(20)Aの発言は「比喩+Φ+動詞？」構文であり、〈比喩と無助詞を含む文〉に該当する。

(20)Bでは、「通り魔」という〈日常的には使われない比喩〉が緊急性のある話題となっている。「通り魔と呼ばれる殺人犯」による殺傷事件が最も話題性・緊急性がある時間的場所的状况では、助詞「が」を伴う表現のほうが自然な会話となる。「殺人犯」と「魔物」が類似していることから、「通り魔」は隠喩(メタファー)である。ここでは、比喩とともに助詞を使うことで〈強調の効果〉を引き出しているため、〈比喩と無助詞を含む文〉にはなっていない。

では、「通り魔でたらしいね」とは言わないのか。たしかに、無助詞には〈臨場感を表現する効果〉を引き出す際には、無助詞が選択されるであろう。しかし、緊急性のある場面では、助詞を使うほうが自然である。また、事態を明確に伝えることが優先されるため、〈助詞を付加〉するというのが本論の見解である。

このように、無助詞の使用をめぐるでは、いくつかの説明が可能となる。本論では、「緊急性のある場面では、助詞を使用して、話し手が伝えたい情報を明確に伝えることが(無助詞による臨場感の表出よりも)優先されるため、解釈の余地の少ない有助詞文が選択される」と考えている。

#### 5 - 4 . 「XはYに」構文

本節では、「XはYに」構文から名詞句XとYの関係を検討した。たしかに、「XはYに」構文は誤用といわれることもある。しかし実際は、天気予報・現地レポート・ブログなどの「書きことば」で使われる。そこで、〈無助詞または助詞の選択〉という視点から、「XはYに」構文は、XとYがどのような関係のときに使われるのか、を論じた。本節は、本論で問題とした「比喩と無助詞の議論」に直接関連するものではなく、その詳細な議論は今後の課題としたい。

(21a) 東京は六本木に行ってきました

(21b) 愛知県は名古屋市にきています

形式的には、「東京」は地名であって人ではないので移動することはできない。擬人法でもなく、主語となりえないはずである。しかし、この例をみると、XとYは、場所を示す名詞句である。そこで、第1に、住所の表記に〈助詞を付加〉したもの(住所説)という説明ができる。XとYの関係が住所説で説明できるとき、無助詞を使って「東京で六本木に行ってきました」という表現も適切である。しかし、次のようにYには「地名ではなく名所」があてはまることがある。

(22) 京都は清水寺に行ってきました

(22)をみると、住所説では説明できないことがわかる。清水寺の名称は「音羽山から湧出する名水のある寺」に由来するため<sup>28</sup>、Yには「日本の名所、観光地」があてはまる場合も考慮する必要がある。

そこで、第2に、「京都には名所がある」という背景知識が前提となっており、X(名所のある地名)とY(名所)の

<sup>27</sup> 西村(2002:290)も「テレビをみる」を換喩として扱っている。

<sup>28</sup> 清水寺は、「清水」という所在地にあるが、「清水にある寺」の意味ではない。

関係と考えること（名所説または背景知識説）ができる。ここで、無助詞に関してみると、名所説で説明できるとき、無助詞を使って「京都の清水寺に行ってきました」という無助詞文は不自然であることがわかる。したがって、住所説で説明できる例は〈無助詞の選択〉も可能であるが、名所説で説明できる例は〈無助詞の選択〉をすると、不自然な文になるため、住所説や名所説では、XとYの関係を十分に説明できないことになる。すなわち、どちらの場合であってもXとYの関係を説明できる見解が必要である。そこで、第3に、YはX（主題）の範囲を限定する関係にある（主題範囲限定説）という見解を検討する。(22)をみると、「京都」と「清水寺」が、〈全体と部分〉の関係にあると言える。これは「京都」以外の構文にも成立するか、次の例を検討する。

(23) 福岡は博多に行ってきました

はじめに、限定的な説明となる住所説と名所説を検討すると、(23)は名所説による説明が成立するように思える。しかし、「博多」は名所そのものではなく、名所のある地名であるため、名所説は不適切であろう。次に、住所説によると、「福岡市は博多区に行ってきました」が言えることになるが、(23)とは意味が異なる。また、筆者の考える限りでは「福岡の博多に行ってきました」と、無助詞を使うことはできないため、住所説は妥当とは言えない。

そこで、「福岡」と「博多」の地域特性を、歴史的文化的に振りかえてみると、九州他県およびアジアとの交流など都市機能の面では「福岡」であるが、新幹線が開通した当時の終着駅としては「博多」が有名である。また、伝統文化の名称や名所・観光地にはお決まりの名物・特産品・お土産にも「博多」の方が使われる。

こうした点を考慮すると、「博多」が「福岡」にはない特有の意味で使われることがわかる。したがって、「福岡」と「博多」が〈全体と部分〉の関係にあるという主題範囲限定説によってXとYの関係を議論することは難しい。

「福岡」は、一般的には「福岡県全域」の意味で使われる。また、天気予報や都市機能の内容で「福岡」が使われるときは「福岡市」（狭義の「福岡」）の意味になる。他方で、「博多」は、一般的には「九州の観光地・歴史的伝統のある町」の意味で使われる。また、「博多駅を中心とした福岡」の意味になることがある。したがって、両者は、上位概念で下位概念を表したり、下位概念で上位概念を表したりと、階層性があることから、提喩（シネクドキ）となり得る。そこで、XとYの関係を考えると、「福岡」の代表としての「博多」という説明ができる（プロトタイプ説：本論の見解）。この見解によれば、「福岡」や「京都」の代表的な地名・名所・観光地がYにあてはまることが説明でき、YがXのプロトタイプとなるときに「XはYに」構文が現れるのであろう。

最後に、「XはYに」構文による効果を、(24b)と比較して検討する。

(24a) 京都は金閣寺に行ってきました

(24b) 京都の金閣寺に行ってきました

一般的には、助詞「の」の「XのYに」構文が使われる。(24a)が使われることがあるのは、(24b)とは異なる意味や効果を含んでいるからである、と筆者は考えている。(24b)が「X>Y」の限定的な意味合いを持つのに比べ、(24a)は「皆さんご存じの京都の中でも、金閣寺に」や「京都といえば金閣寺に」など、より良い印象を与える効果や「金閣寺」という指示対象から読みとれる一般的知識を把握させる効果がある、と言える。また、「金閣寺」という名称は、通称であり、鹿苑寺の中心となる舍利殿「金閣」がプロトタイプとなっている。すなわち、「金閣寺」は提喩（シネクドキ）になる。したがって、YがXのプロトタイプとなるとき「XはYに」構文が成立し、XやYが比喩であることが多い。

## 6. おわりに

本論の主張をまとめると、以下のようになる。

- 1) 比喩と無助詞は、構造と意味において関連性を有している。
- 2) 無助詞を、〈助詞の省略〉という説明で片付けることはできず、〈助詞の付加〉という視点のほか、〈無助詞の選択〉、〈助詞必須〉という分類により、〈随意的または義務的〉な〈無助詞または助詞の選択〉という説明が必要であ

る。

- 3) 「書きことば」( 宣伝広告、ウェブサイト ) においても無助詞は顕著にみられる。
- 4) 無助詞を議論する際には、「話しことば」と「書きことば」の相違を考慮しながら、それぞれにおける無助詞特有の臨場感や親近感を表現する機能を検討する必要がある
- 5) 〈比喻と無助詞を含む文〉は、比喻と無助詞の前後関係によって「前置比喻」と「後置比喻」の2種類の構造があり、助詞の有無によって、比喻の意味が連動して変化する関係になっている。
- 6) 〈対比の意味を含蓄している比喻〉、〈意外性・偶然性・非日常性のある比喻〉が含まれる文は、助詞を付加することが多い。
- 7) 緊急性のある場面では、助詞を使用して、話し手が伝えたい情報を明確に伝えることが( 無助詞による臨場感の表出よりも ) 優先されるため、無助詞が現れない。
- 8) 「XはYに」構文は、YがXのプロトタイプとなるとき、成立しており、XやYが比喻となって〈比喻と無助詞を含む文〉になり得る。

日頃、なんとなく使っている比喻と無助詞が、構造と意味において関連性を有していることを、できる限り身近な例を挙げて論じた。全体的に「食べ物」の例が多くなったため、空腹を感じて読みながら食べた( 食べながら読んだ ) という読者もあると思われる。筆者は、本論を書き終えた後、例として大いに活躍した食べ物を味わう予定であるが、冒頭に収まった「たい焼き」については、論文の構成をしながら、既に腹の方にも収まった。そして、私たちはいかに複雑な情報を比喻と無助詞に埋め込んでいるか、という言語表現の深さを学ぶことができた。

[ 謝辞 ] 本論文の執筆にあたって、慶應義塾大学の辻幸夫教授には、本論に目を通してくださり、貴重なコメントをいただきました。たいへんお世話になりました。辻研究会で学んだ成果として本論文にまとめることができ嬉しく思います。また拙稿を読み、貴重なご意見をくださった小屋逸樹教授にもお礼申し上げます。その他、お名前を一人一人あげられませんが、本論文の草稿を読み、批判や提案をしてくださった方、ありがとうございました。

## 〈引用・参考文献〉

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会
- 大谷博美. 1995. 「ハとヲと中 -ヲ格の助詞の省略-」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版
- 大谷博美. 1995. 「ハとガと中 -ハもガも使えない文-」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版
- 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』東京大学出版会
- 尾上圭介. 1987. 「主語に『は』も『が』も使えない文について」国語学会発表要旨『国語学』150号48頁
- 加賀野井秀一. 1999. 『日本語の復権』講談社現代新書
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房 331頁以下
- 加藤重広. 2004. 『日本語語用論のしくみ』研究社
- 行場次朗・箱田裕司(編著). 2000. 『知性と感性の心理—認知心理学入門』福村出版
- 楠見孝. 1995. 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房
- 國廣哲彌. 1981. 「一見非論理的な表現」『言語』10巻9号 大修館書店 42-47頁
- 國廣哲彌(編). 1982. 『ことばの意味3 - 辞書に書いてないこと』平凡社
- 小池清治(他編著). 1997. 『日本語学キーワード事典』朝倉書店
- 小屋逸樹. 2008. 「『私、困るんです。』-無助詞構文と発話のモード」『教養論叢』128号 45-67頁
- 小屋逸樹・辻幸夫. 2008. 「無助詞文とは何か」『慶應の教養学』慶應義塾大学出版会 297-312頁
- 菅井三実. 2003. 「概念形成と比喩的思考」辻幸夫(編)『認知言語学への招待』127-182頁
- 辻幸夫. 1996. 「意味の習得」池上嘉彦(編著)『英語の意味』大修館書店 135-156頁
- 辻幸夫. 2002. 「メタファーの基本用語」『言語』31巻8号 大修館書店 24-25頁
- 辻幸夫(編). 2002. 『認知言語学キーワード事典』研究社
- 辻幸夫・菅井三実. 2006. 「戦略的比喩と言語行動-予備的考察-」『教養論叢』125号 21-41頁
- 筒井通雄. 1984. 「『ハ』の省略」『言語』13巻5号 大修館書店
- 富田英夫. 2007. 『日本語文法の要点』くろしお出版
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」『認知言語学I—事象構造』東京大学出版会 285-311頁
- 丹羽哲也. 2006. 『日本語の題目文』和泉書院 289-306頁
- 長谷川ユリ. 1993. 「話しことばにおける『無助詞』の機能」『日本語教育』80号 158-168頁
- 日野資成. 2003. 「慣用表現における意味変化のプロセス 換喩と比喩」『解釈』49巻5号 寧楽書房 50-52頁
- 初山洋介. 2009. 『日本語表現で学ぶ 入門からの認知言語学』研究社
- 森田良行. 1995. 『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』創拓社
- 森雄一. 2009. 「提喩の認知言語学」認知言語学の学び方6 配布資料
- 安井稔. 1978. 『言外の意味』研究社
- 山田剛一・中川裕志. 1995. 「助詞・ゼロ助詞・無助詞」『信学技報』電子情報通信学会
- 山梨正明. 2007. 『比喩と理解』新装版 東京大学出版会
- 李在鎬. 2010. 『認知言語学への誘い—意味と文法の世界』開拓社
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980, 2003 with a new afterward. *Metaphors We Live By*. Chicago/London: University of Chicago Press. (渡部昇一(他訳)1986. 『レトリックと人生』大修館書店)
- Masunaga, Kiyoko. 1988. Case deletion and discourse context. W. Poser (ed.), *Papers from the second international workshop on Japanese syntax*, 145-156. Stanford: CSLI.

〈関連資料〉



以上